

手首から先のない腕を見て、私は虫下しの薬をこの男性にどのように渡そうか迷った。彼の口へと薬を持って行こうとしたとき、先ほどの腕が私の前にそっと差し出した。「そうだ、彼の手は使えるのだ。」と気づかされ、安易に口元へ薬を運ぼうとした自分の手をすぐ引っ込めた。そこで私は丸くなった手首の先のわずかにぼみに丸い薬が落ちないように静かに置いた。そして彼は、薬を上手に口元へ運び、水と一緒に飲んだ。

これは私がカンボジアでの医療ボランティアに参加した時の体験である。ある村で出会った先ほどの男性は内戦によって障がいを負い、医療サービスを受けるために車椅子で弟と一緒に私たちの所へやって来た。戦争中に受けた虐待の話聞いて、私は恐怖と悲しみでいっぱいになった。そして目の前にいる彼にせめてものことをしようと思い、虫下しを口元へ運ぼうとしたのだ。彼の外見と体験談から、私は相手が不自由で、何もできないだろうと一方的に捉えてしまったからである。

しかし、彼が腕を差し出してくれたおかげで、私は「彼にはできる。」ということに気付かされた。身体の不自由による生活上の不便はあるだろう。しかし不自由であっても、何もできないのではない。現に彼は弟の助けを得ながらも、私たちのテントへとやって来たのである。そして私は帰りのバスの中で、内戦が終わってから今まで約30年間、彼はどのような毎日を暮らしてきたのだろう、と思いを巡らせた。

このような体験から、私は看護の対象となる人が病や困難にありながらも、「自分にはできる」という実感を持って頂けるように接していきたいと思うようになった。自分で薬を飲んだ先ほどの男性の笑顔を私は今でも覚えている。あれこれと手を差し出し、私が良かれと思ってする行為はかえってその人の持つ力を妨げ、自尊心をも傷つけてしまいかねない。そのためには相手の現在に至るまでの背景を考えること、そしてたとえ小さなことでもその人にできることがあれば、見守って支えることが鍵であると考えた。そのようにして得た達成感や喜びは看護の対象者本人のものとなるからだ。

看護学校に入り級友らと過ごすいま、言葉の大切さを学んでいる。何気ない一言が相手を傷つけることもあれば、たった一言が相手を元気にすることもある。看護の場における看護技術の提供が一過性であっても、対象に語りかけた言葉は良かれ悪しかれ、私がある場を離れても相手の心に残ることがあるだろう。だから適切な言葉を選び、継続して相手の支えとなるような言葉をかけ、そしてその人が自分にはできると実感できるような看護が現時点での私の看護観である。